

## スペイン語の se 中動態（再帰構文）における可能の意味

志 波 彩 子

### 1. はじめに

通言語的に「可能」という意味に関わる文法カテゴリーは、ヴォイス、テンス・アスペクト、ムードないしモダリティと多岐にわたることが知られる（山口2010）。本研究は、日本語のヴォイス体系とスペイン語のヴォイス体系の対照を目指すのが、その前段階として、スペイン語の再帰接辞（reflexive clitic）se による中動態（middle voice）の体系において、可能の意味を持つ構文があることを指摘し、その可能の意味がどのような原理によってもたらされるか、そのメカニズムを明らかにすることを目的とする。

本研究の出発点となったのは、出口（1982）の以下の例文であり、またそれを引用した Shibatani（1985）の議論である。Shibatani（1985）は、通言語的に受身（passive）の意味を表す形式が、受身のみならず自発（spontaneous）や可能（potential）、再帰（reflexive）、相互（reciprocal）といった意味を表すことを議論している。この中で、スペイン語の se による可能の意味の例として出口（1982）を引用して次の文を挙げている。

- (1) ¿Se va por aquí a la estación? (Shibatani 1985: 828、出口1982: 314)  
 se goes via here to the station<sup>1</sup>  
 ‘Can one go to the station from here?’

この文は、確かに「ここから駅に行けますか」と訳するのが自然であるし、可能の意味を持つように感じられる。一方で、se が表すこうした可能の意味は、日本語のラレル文が表す多様な可能の意味とは直感的に別種のものであるという印象もぬぐえない。では、スペイン語の se 中動態におけるこうした文は、どのような条件によって可能の意味を帯びているのか。この点を明らかにするとともに、意味的に非常に関連の深い規範（normative）の意味についても議論する。

<sup>1</sup> 本稿では、解釈上グロスが必要と思われる例文にのみグロスを付ける。

## 2. 先行研究

本研究では、seによる構文の体系、すなわち内的再帰（身づくろい等）を中心にして他動と受身の間に広がるヴォイスの体系を中動態（middle voice）と呼んでいる。伝統的なスペイン語学では（他のロマンス諸語やドイツ語学でも未だそうであるが）、再帰接辞（再帰代名詞）による構文の体系を「中動態」と呼ぶ研究者は多くない。これは、古典ラテン語や古典ギリシャ語に存在した動詞の屈折による形態論的な体系こそを中動態と呼ぶべきだ、という言語観によるものと思われる。しかし、実際、再帰接辞 se と動詞との組み合わせによる構文は、古典ラテン語や古典ギリシャ語に存在した中動態と酷似した意味・機能領域をカバーしており、「中動態」という用語を死滅した言語のカテゴリーのみに与えて、現存する言語の同様の意味・機能的現象に当てはめない理由が見つからない。本研究では、中動態は現存する多くの言語に見られるヴォイスの重要なカテゴリーであると考えられる。ヴォイスは、主語が自らの意志で（他者に対して）行為を発するの可否かという対立を文法カテゴリーとして表すものだが、中動態<sup>2</sup>は内的再帰を中心にしてこの体系を拡げているのである。

### 2.1 Kemmer (1983) の中動状況タイプ

Kemmer (1983) は、中動状況タイプ（middle situation type）と呼ぶ状況タイプを提唱し、この状況タイプに特定のマーカーが表れる言語は中動態を持つとした。スペイン語では、この中動状況タイプのほとんどに se が用いられる。Kemmer (1983) は次のような状況の中動状況タイプとしている。以下、Kemmer の中動状況タイプに沿って、スペイン語の se による例を挙げる。

#### ◆ Kemmer (1983) の中動状況タイプ

##### 1. 身づくろい（Grooming or body care）

bañarse 入浴する、afeitarse 髭をそる、peinarse 髪をとく、pintarse 化粧する、ponerse 身につける、ducharse シャワーを浴びる、limpiarse los dientes 歯を磨く、lavarse la cara 顔を洗う、等

##### 2. 姿勢変化（Nontranslational motion, change in body posture<sup>3</sup>）

2 なお、近年のスペイン語学ではこの「中動態 la voz media」という用語が se による再帰構文にも用いられ始めている。ただし、中動態と呼ぶ範囲（外延）は論者により異なっている。Mendikoetxea (1999) では、本稿で能格構文とする自然発生的変化を表す構文や、levantarse などの起動相用法（inchoative）と呼ばれる構文、及び中動受身構文が中動態に含まれている（同：p. 1642）。

3 Kemmer (1983) ではこの2つを分け、前者には「turn, stretch one's body」、後者には「sit down, kneel」のような例を挙げているが、筆者にはこの2つを区別する積極的な理由が分からないため、これを「姿勢変化」として1つにまとめる。

sentarse 座る、levantarse 立つ、agacharse しゃがむ、acostarse 横になる、inclinarse お辞儀する、montarse またがる、等

3. 自己利益 (Self-benefactive middle)

(2) **Se construyó** una casa.

彼は（自分のために）家を建てた

4. 本来的相互行為 (Naturally reciprocal event)

pelearse 喧嘩する、encontrarse 会う、combinarse 合同する、abrazarse 抱き合う、等

5. 感情・心理変化 (Emotion middle)

enfadarse 怒る、irritarse いらだつ、alegrarse 喜ぶ、afligirse 嘆き悲しむ、enamorarse 恋する、aburrirse 退屈する、divertirse 楽しむ、calmarse 落ち着く、arrepentirse 後悔する、preocuparse 心配する、cansarse 疲れる、等<sup>4</sup>

6. 感情的発話行為 (Emotive speech act)

quejarse 嘆く、不平を言う、enorgullecerse 自慢する、lamentarse 嘆く、愚痴をこぼす、confesarse 告白する、reconocerse 自分の罪を認める、等

7. 認知 (思考, Cognition middle)

pensarse 思案する、creerse 思い込む、saberse 覚えこむ、知り尽くす、conocerse 知り尽くしている、acordarse 覚えている、negarse 拒否する、等

8. 自然発生の「なる」 (Spontaneous events)

ponerse、volverse、hacerse、convertirse：すべて主語がある状態に「なる」の意

9. 移動運動 (Translational motion)

irse 立ち去る、marcharse 立ち去る、subirse 登る、pararse 立ち止まる、quedarse 留まる、等

10. その他の内向的的行為

portarse 振る舞う、suicidarse 自殺する、atreverse 思い切って～する、等

以上のような状況タイプが中動態の中心領域を成すと考えられる。Benveniste (1966) が挙げる中動態の例も、上の例同様、ほぼすべて人が主語に立つ行為である。中動態の中心にあるのは、非対格や能格と呼ばれるような自然発生の意味を持つ無生主語の動詞（割れる、溶ける等）ではなく、人間が自分を中心に自分の領域で展開する行為を表す動詞（特に身づくろいと姿勢変化は重要）であると言える。ただし、上に挙げた動詞の多くは中動態が他動詞と対になって自動詞相当の意味になっている（「bañar 入浴させる vs. bañarse 入浴する」「levantar 起こす、立てる vs. levantarse 起きる、立ち上がる」等）。このように、中動態は人主語の行為でも他動詞の

<sup>4</sup> この「感情・心理変化」は、特に他動詞構文との対応が顕著で（enojar 怒らせる vs. enojarse 怒る、alegrar 喜ばす vs. alegrarse 喜ぶ、等）、「他動詞を自動詞化する」という機能が意識される。このことが、次に見る能格構文（反使役化、自然発生）の拡張に関係していると考えられる。

自動詞化として生産的に機能しており、この機能が無生主語の自然発生的変化を表す動詞にも拡張し、中動態によって非常に生産的に他動詞の自動詞化を行っている。

## 2.2 Haspermath (2003) の意味地図

Haspermath (2003) では、意味地図の有効性を示すために、各言語の中動態マーカーが覆う範囲を意味地図によって比較している。中動態の定義は、その形式が覆う範囲の広さにより、往々にして非常に抽象的になりがちである。例えば、Kemmer (1993) では「事態の相対的な精緻化 (relative elaboration of events)」において、中動態は「事態の精緻化の度合いの低さ (low degree of elaboration of events)」を表すと規定されている (つまり、他動詞よりも事態の精緻化の度合いが低い、自動詞よりは相対的に高い、という意味)。中動態とは何か、その本質を捉える上でこうした抽象的な定義も必要であるが、この抽象的定義だけでは様々な言語の中動態の違いを捉えられない。諸言語の中動態を比較するには、意味地図が有効であるとす。そして、Haspermath (2003) では、諸言語が持つ中動態の主な用法として次の7つが取り上げられている。ここでは、スペイン語の *se* の例を挙げる。

- (3) Juan se ama (a sí mismo<sup>5</sup>).  
ファンは自分 (自身) を愛している。【完全再帰 full reflexive】
- (4) José se duchó.  
ホセはシャワーを浴びた。【身づくろい grooming】
- (5) María se sentó.  
マリアは座った。【身体移動 body motion】
- (6) Luis y José siempre se pelean.  
ルイスとホセはいつも喧嘩する。【本来的相互行為 naturally reciprocal】
- (7) La puerta se abrió.  
ドアが開いた。【反使役化 (自然発生) anticausative】
- (8) Este libro se lee fácilmente.  
この本は簡単に読める。【可能受身 potential passive】
- (9) Se firmaron los tratados.  
条約が調印 (サイン) された。【受身 passive】

さらに、ロシア語の「-sja/s'」では「脱目的語化 deobjective」という用法があるとしている ((10))。また、ロシア語の中動態は用法が非常に拡大しており、例えば受身用法において、ス

5 完全再帰の用法のみ、「a sí mismo (自分自身を／に)」という強調の句と共起することができる。Haspermath はこの「sí mismo (自分自身)」を「強調再帰 emphatic reflexive」と呼んでいる。

スペイン語では動作主句を「～によって」という形で表示することには非常に制限があるのに対し、かなり自由に動作主句と共起できるようである。

(10) Sobaka kusant-sja. (Haspermath 2003: 224)

犬は嘔む。【脱目的語化 deobjective】

(11) Vopros obsizdal-sja komissiej. (Haspermath 2003: 224)

その問題はコミッティによって議論された。【受身 passive】

このように中動態の用法が拡大しているロシア語では、完全再帰には「sebja」という異なる形式が用いられる<sup>6</sup>。

(12) Iuda ubil sebja. (Haspermath 2003: 224)

ジュダスは自分を殺した。【完全再帰 full reflexive】

Haspermath (2003) は以上のように中動態の諸用法を確認した上で、各言語の中動態マーカがどの意味・機能までを覆っているのかを意味地図によって示し、比較している。さらにこの意味地図は、通時的変遷を予測するのにも適しているとして、意味地図を簡略化し線状に並べた上で、次の図 1 のような通時的変遷の比較を示している<sup>7</sup>。ここでは、「強調再帰 (emphatic reflexive)」が加わっているが、この強調再帰とは、「The mayor himself opened the exhibition. (市長自身が展覧会を開いた)」のような「自身」の用法のことであるとする。ロマンス諸語ではこの強調再帰は中動とは別の形式が担っており、スペイン語では「sí mismo (self same)」という形式が用いられる<sup>8</sup>。さらに本稿では、Haspermath の図に「非人称 impersonal」の用法を加えた。スペイン語では、この非人称用法は後発の用法で、受身用法から派生したことが知られる (Monge 1955, 2002、寺崎 2011)。非人称用法とは、動作主を背景化し、事態実現の局面を前景化して述べる受身用法が自動詞にまで拡大したもので、動詞に一致する文法項

6 Kemmer (1993) は、中動態マーカが多くの意味・機能を担うようになると、中動態の出発点ともいえる完全再帰の用法に別形式が現れるのではないかという仮説を述べている。このように中動態マーカを2つ (強形式と弱形式) 持つ言語はロシア語だけでなく、Djola 語、ラテン語 (se と -r)、トルコ語 (kendi- と -In-) などが挙げられている (pp. 25-26)。

7 Mendikoetxea (1999) でも、こうした通時的発達について少し触れられている。Mendikoetxea は Kärde Sven (1943) “Quelques manières d’exprimer l’idée d’un sujet indéterminé ou général en espagnol” を引用して、上の「可能受身 (Mendikoetxea では media (中動) ないし media-passiva (中動受身) と呼ばれる)」は受身や非人称に対して歴史的に先に発達したと考えられることを述べている。そして、フランス語の se 構文ではスペイン語やイタリア語のように受身が発達していないようであり、フランス語の se は他のロマンス諸語に比べて発達が遅れていると述べている (同: p. 1657)。

8 なお、先に (3) で示したように、この「sí mismo (self same)」は完全再帰を強調するために用いられる。これを完全再帰の起源と見れるかどうかはなお検討の余地がある。

としての主語を欠く構文である。

(13) Este libro se publicó en 1999.

この本は1999年に出版された。【受身 passive】

(14) Se vive bien aquí.

ここではよく暮らされる（暮らし向きが良い）。【非人称 impersonal】

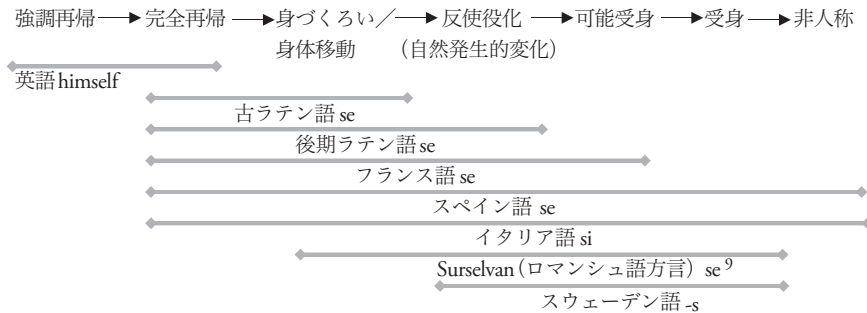


図1：8言語における再帰／中動態形式の領域 (Haspermath 2003: 235を改変)<sup>10</sup>

こうした意味地図は、各言語の中動態マーカがどの意味領域までを覆っているのかを、ごく大雑把にはあるが、把握するのに適している。本研究では、上の「可能受身」が以下の議論の中心となる。Haspermathが可能受身と呼ぶこの構文は、スペイン語学では「中動受身構文 (media-pasiva)」と呼ばれる。上の意味地図では、この中動受身構文が、自然発生的変化を表す能格構文（上の図の反使役化）と受身構文にまたがる構文、ないし両者をつなぐ構文である、ということが確認できる。この中動受身構文は、英語で中間構文 (middle construction) と呼ばれる構文にほぼ相当する。そこで、以下、英語の中間構文について、主要な研究を概観したい。

### 2.3 英語の中間構文

英語の中間構文は、他動詞が能動の形のまま（つまり受動形にならずに）対象が主語に立つ特殊な構文ということで、今もなお多くの関心を集めてやまない現象である。その議論の中心は、中間構文がなぜ成立しうるのかという中間構文成立のメカニズムと、中間構文の表す「属性叙述」という意味に関するものである。

英語の中間構文成立のメカニズムについては、「この本はよく売れる」は言えても「\*この

9 くわしくは Kemmer (1993: 166-175) を参照のこと。

10 なお、Surselvan 語 (Sursilvan 語) とスウェーデン語の中動マーカに非人称用法があるかどうかは調査不足のため不明である。

本はよく買える」は言えない、ということなどから、動詞の語彙的な意味の制限として議論されてきたが、吉村（2012）は、動作主の行為を対象が属性として請け負うことを「責任」と呼び、対象への責任が認可されるときに中間構文が成立するとした。この「責任」の発生順序には2つの概念類型があり、1つは「所与の行為が高度に慣習化され、コミュニティー内で共有された知識となっている場合」で、これを「内在型属性 (inherent property)」と呼んでいる（同：p. 211）。一方、「述語の表す行為に応じて臨時的に属性が創発する場合」を、「創発的属性 (emergent property)」と呼ぶ（同：p. 211）。つまり、次の(15)が文法的なのに対し(16)が非文なのは、動詞「kick」の語彙的なアスペクトや意味タイプによるものではないことが(17)から分かるのである。

(15) Japanese cars drive easily. (吉村2012: 202)

(16) \*Japanese cars kick frequently. (日本車はしばしば蹴られる) (吉村2012: 206)

(17) (a professional football player comments on a new type of football)

Well, I don't know, this new ball doesn't kick very well.

(吉村2012: 216が Lemmens 1998: 80<sup>11</sup>を引用して)

このように、中間構文が成立するためには、動詞の表す行為と主語に立つ対象との間に属性として認可されるだけの関係がなければならないわけである。つまり重要なのは、対象への働きかけの行為が対象の属性として責任転嫁できるか、その認知的基盤があるかどうかで、そうした認知的基盤に段階性があることを理論的に整理した点が吉村（2012）の功績であると思われる。

また、本研究が問題にしている中間構文の「可能」の意味に関して示唆的な指摘をしている論考として本多啓氏の一連の研究がある。本多（2014）は、中間構文は(18)のような無対他動詞によるものが典型とされるが、これに限られず、(19)や(20)のような無対非対格自動詞にも中間構文の特性が適用されると主張し、こうした自動詞文において「ゼロ動作主の読み込み」が起こることが中間構文の発生・成立の重要な契機であると述べている（本多2014、2018）。

(18) This book reads easily.

(19) a. The shelving comes to pieces for easy transport.

b. このアジは新しいので刺身になる。 (本多2014: 15)

11 Lemmens, M. (1998) Mediopassives: Fuzziness and Speaker Evaluation. In: Küh-Iwein, Wolfgang, (ed.) *Language as Structure and language as Process: In Honor of Nickel on the Occasion of His 70<sup>th</sup> Birthday*, pp. 47–62. Trier: Wissenschaftlicher Verlag.



- (20) a. This dress **rumpled** easily.  
 b. この服はすぐにしわになる。 (本多2014: 15)

さらに本多 (2018) は中間構文が可能表現として機能する仕組みとして、次の (21)(22) を挙げている (本多2018: 31)。

- (21) 中間構文の発生・成立における最初の契機は  
 a. 自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み  
 b. 原因帰属
- (22) a. (明示的に表現されない) 話し手自身が動作主  
 b. 意図をもって行為する  
 c. やって見たけどうまくいかなかった／やってみたら思いがけずうまくいった<sup>12</sup>  
 d. 行為の目標ないし結果に相当する事態を自動詞文で表す  
 e. 行為の成否の原因を主語に帰属

本多は可能表現の認知的な動機付けは原因帰属にあると述べている。この原因帰属とは、動作主の行為の成否 (結果) を主語の属性が原因であるとする事、すなわち吉村 (2012) の「責任」の概念に通ずるものかと思われる。そして、日本語においても無意志自動詞 (能格自動詞、非対格自動詞) の表現が可能の意味を持ったり、「自発」や「出現」の表現が可能表現としての意味を発達させる現象も、その認知的基盤は原因帰属であると述べている (本多2018: 31)。この本多の議論は、無意志自動詞 (非対格自動詞、能格自動詞、自然発生的変化の自動詞) と可能の意味を安定して帯びる中間構文との関係を考える上で重要な議論となっている。

### 3. se 中動態 (再帰構文) が可能の意味を帯びるとき

本節では、se 中動態における構文がどのような条件下で可能の意味を持つのかを考察する。スペイン語の se 中動態が可能の意味を帯びるメカニズムについては、管見の限り、それほど積極的には議論されていない。se 中動態が可能の意味を構文として安定的に持つのは、先にも述べた通り典型的な中動受身構文 (media-pasiva)、つまり Haspermath が可能受身と呼ぶ構文である。以下、中動受身構文の特徴を述べ、これがなぜ可能の意味を帯びるのかを考察し、さ

<sup>12</sup> この「やってみたらうまくいった」というのは、実現系の可能 (個別一回的な出来事として実現した可能文) なので、中間受身構文の表す総称的な動作主の超時の (習慣的な) 事態の特性にはそぐわないのではないかと思われる。



らに非人称構文や受身構文が可能の意味を持つ場合についても議論する。

### 3.1 中動受身構文<sup>13</sup> (middle-passive construction) と能格構文、受身構文

中動受身構文は、先の Haspermath (2003) の反使役化構文に相当する能格構文（自然発生的変化構文）及び受身構文と、重要な共通点を持つ。それは、意味上の目的語、つまり対象が統語上の主語に立つということである。

(23) **Se secaron** las toallas (con el viento).

(風で) タオルが乾いた。【能格構文（反使役化、自然発生的変化）】

(24) Los pantalones de algodón no **se planchan** fácilmente.

the ズボン of 綿 not se irons easily

綿のズボンはアイロンをかけるのが簡単ではない（アイロンをかけにくい）。

【中動受身構文（可能受身）】

(25) Todavía no **se han** planchado los pantalones.

yet no se have.3PL.PRS. iron.PP the ズボン

そのズボンはまだアイロンをかけられていない。【受身構文】

このうち、能格構文（反使役化、自然発生的変化）は、動作主の介在なしに、対象が持つ属性（property）と何らかの外的要因（上の(23)では「風で」）によって変化が実現することを表す。つまり動作主が構文の意味上含意されないときに能格構文と解釈される。ただし、スペイン語の場合は、すべての能格構文は、前後文脈で動作主が含意されれば受身構文とも解釈される。上の(23)も、動作主の意図を含む句とともに用いられれば、受身解釈となる((26))。つまり先の本多(2014、2018)の言うような「自動詞におけるゼロ動作主の読み込み」が se 中動態の能格構文では常に起こり得る。

(26) **Se secaron** las toallas para limpiar el suelo.

se dry.3PL.PST. the タオル for clean the 床

床を拭くためにタオルが乾かされた。【受身構文】

このように、se 中動態においては、能格構文と受身構文の形態統語上の差がほとんどない。受身構文では動作主性の低い経路・手段的な動作主が「por によって、を通して」を用いて共起することが可能とされているが、実際の使用はほとんどない (Sánchez López 2002: 58–60)。

<sup>13</sup> 中動受身構文は、多くの研究では単に「medio (中動)」と呼ばれることが多いが、本研究では Mendikoetxea (1999) 及び Sánchez (2002) の用語を採用し、中動受身と呼ぶ。

- (27) **Se usó** todo el armamento por el ejército.  
se use.3SG.PST. all the weapon by the army

軍隊によってすべての兵器が使われた。【受身構文】(Gómez Torrego 1992 [2013: 13])

能格構文と受身構文の違いを強いて挙げるなら、能格構文では主語に立つ対象は動詞に前置も後置もするが、受身構文では対象は原則的に動詞に後置する。そして、動詞の意味タイプとして、動作主の介在なしに変化が実現するような動詞(romperse 壊れる、derretirse 溶ける、doblarse 折れる、teñirse 染まる、abrirse 開く、等)では能格構文(自然発生的変化の解釈)が可能であるし、動作主の介在なしには変化(事態)が起こり得ない動詞(construir 建設する、comprar 買う、lavar 洗う、pintar 塗る、leer 読む、limpiar 掃除する、comer 食べる、等<sup>14</sup>)の動詞では受身構文にしかならないということである。

次に中動受身構文と受身構文の違いであるが、中動受身構文は特定の対象が主語に立ち、動詞に前置されて主題化される。また、テンス・アスペクト的には未完了時制(超時)であり、難易副詞や評価性の副詞があるのが典型的構文形式である。これに対し受身は、先に述べたように対象は原則として動詞に後置し、不特定の名詞句であることも少なくない<sup>15</sup>。また、受身構文の時制は(24)や(26)のように未完了時制に限られない。

以上の3つの構文形式をまとめると、以下のようになる。

- (28) 能格構文の構文形式 [非情物<sup>対象</sup>主語 se 変化他動詞 3人称]<sup>16</sup>  
意味: 動作主の介在なしに対象の属性と外的要因によって変化が実現する
- (29) 受身構文の構文形式 [se 他動詞 3人称 非情物<sup>対象</sup>主語 (por 組織<sup>手段的動作主</sup>等)]  
意味: 何らかの動作主によって当該事態(変化)が実現する
- (30) 中動受身構文の構文形式 [定名詞<sup>対象</sup>主語 se 他動詞 3人称未完了時制 難易副詞]  
意味: 対象の属性が動作主の行為が実現するだけの許容性としてある

<sup>14</sup> Mendikoetxea (1999) の p. 1655 を参考にした。

<sup>15</sup> この他の違いとして、Mendikoetxea (1999: 1656) では、受身構文には心理動詞(状態性の動詞、saber や detestar など)も用いられるのに対し、中動受身構文では意味上の主語は必ず動作主でなければならないため、意味上の主語が経験者であるこれらの動詞は用いることができないとしている。また、中動受身構文では複数の人名詞が主語に立つことができるが、受身構文ではこれは認可されない(つまり完了時制の構文では人名詞主語の受身解釈は成立しない。Sánchez López 2002: 66)。

<sup>16</sup> 能格構文も受身構文も、非情物の対象が主語に立つ構文であるため、動詞は3人称に限られ、また、se の人称変化もない。スペイン語では、「Juan se ama. (ama は loves の意)」という文は「ファンは(みんなに)愛されている」という意味にはならず、「ファンは自分を愛している」という再帰構文(完全再帰)の意味になる。よって、se 中動態においては人が主語の受身構文はほぼ存在しない(コピュラ動詞と過去分詞による受身構文では人主語が可能である)。

さて、動詞の意味タイプとしては、中動受身構文を構成する動詞は、受身構文と能格構文を組み立てる動詞と重なる。しかし、論者によってどこまで中動受身構文と見なすかには多少の違いがある。本研究では、外的動作主が介在しなければ起こり得ない事態を表す動詞によって構成される (31) や先の (24) のような構文に加え、(32) のように動作主の介在なしに変化が実現しうる動詞、つまり能格構文を構成する動詞も中動受身構文と見なすことにする。

(31) a. Este tejido **se corta** con mucha facilidad.

この布はとても簡単に切れる。

b. Este auto **se estaciona** fácilmente.

この車は簡単に駐車できる。

c. Este libro **se lee** fácilmente.

この本は簡単に読める。

(32) a. Esta toalla **se seca** rápido después de su uso.

このタオルは使用後に早く乾く。

b. Esta medicina **se mezcla** fácilmente.

この薬は簡単に混ざる。

【以上すべて中動受身構文】

上の文はいずれも、完了時制で述べられると、受身構文 ((31)) ないし能格構文 (自然発生的変化、(32)) の解釈となる。

### 3.2 中動受身構文と可能の意味

さて、この中動受身構文は、「可能」の意味を持つことが知られる。Sánchez López (2002) では次のように述べられている (同 p. 64、太字は志波)。

(33) El aspecto imperfectivo y la interpretación de propiedad de las construcciones medio-pasivas están íntimamente ligados a su valor modal. Estas estructuras implican **una lectura de posibilidad**, de ahí que una oración como *esta camisa se lava fácilmente* no signifique que se esté lavando ahora sino que **se puede lavar**. (中動受身構文の未完了アスペクトと特性の解釈は、モーダルな意味と密接に結びついている。この (中動受身の) 構造は**可能性の読み**を含意し、それによって、「このシャツは簡単に洗える」という文は、今洗われているという意味ではなく、「洗うことができる」という意味を表している。)

だが、Sánchez López (2002) 及び García Negroni (2002) でも、この構文がなぜ可能の意味

を持つかについて、妥当な説明は与えていない<sup>17</sup>。中動受身構文は「対象の特性 (property)」を表すということは盛んに言われるが、なぜこの構文が可能の意味を持つのか、という問い自体がほとんど議論されていない<sup>18</sup>。

本研究は、構文が可能の意味を帯びる原理を考えるにあたり、尾上 (1998) の可能の定義を援用したい。尾上 (1998) は、「可能」という言葉を用いずに「可能」を定義した重要な議論である。尾上 (1998) によれば、可能とは次のように定義される。

- (34) 動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する (尾上1998: 93)。

この定義によれば、可能の意味・解釈が表れるためには、次の4つのファクターが必要であると考えられる。

- (35) 1) 動作主の含意  
2) 動作主の意図・期待の含意  
3) 行為実現の許容性、萌芽 (条件) の存在  
4) 時間を超えて成立する行為を表す

4) についてであるが、尾上は「許容性・萌芽がその状況の中に存在する」と述べている。これは、ある程度時間を超えて行為実現の許容性 (条件) がある、ということの意味する。このため尾上は、「花子は納豆が食べられた」や「やっと論文が書けた」のような、すでに実現した行為を表す可能表現 (いわゆる実現系の可能) は「可能」とは考えていない (「意図成就」

<sup>17</sup> Sánchez López (2002) や García Negroni (2002) などのスペイン語学の議論では、この可能の意味は可能の演算子 (operador de posibilidad) が中動受身の事態構造の中にあることでもたらされると考えられている。そして、この文の原因項 (Causa) は可能の演算子によって量化されるため、表れないのだと説明している (Sánchez López 2002: 64)。だが、原因項が表れないのは中動受身構文だけではない。よって、なぜ中動受身の文の事態構造には可能の演算子があるのか、可能の意味と規範や中立的な習慣の意味との関係がどのようなものであるのか、中動受身以外の受身構文や非人称構文に可能の意味が表れる場合はどのように考えるのか、など、詳細な議論はない。

<sup>18</sup> 春木 (2009) でも、フランス語の再帰構文受動用法 (本稿で議論している中動受身構文にほぼ相当する) と中立用法 (本稿の能格構文と受身構文の一部に相当する) における可能と規範解釈について、本稿と同じような問題関心で議論されている。多くの例文と時制の違い等に関する議論は参考になるところも多いが、春木は可能の解釈と規範の解釈を左右するものが内在的属性と外在的条件であると議論している。内在的属性とは主語の対象が持つ属性のことであり、外在的条件とは一般的慣習のことを主に指すようである。しかし、本稿で重視している「動作主の意図・期待」については考察していない。日本語学の可能表現の議論でもしばしば言われることであるが、可能の意味には動作主の意図・期待があることが必須であると考えられる。春木 (2010) でもさらに多くの例文が扱われて議論されているが、フランス語との比較は今後の課題としたい。

という別の用語を与えている)。可能とは、あくまで現実界で成立していない、ポテンシャルな事態であると捉えている。

以上のファクターのうち、特に重要なのは、2)と3)である。1)と4)は、「太郎はいつも1番に起きる」のような行為動詞が習慣的の観点で述べられる場合にも当てはまる。よって、この1)と4)の特性だけでは可能の意味を持つとは言えない。これに対し、例えば、

- (36) a. 明日行く川で泳ぎたいんだけど、{?\*泳ぐ／泳げる} かな。  
 b. A: 駅に行きたいんですが、どうやったら {??行きますか／行けますか}。  
 B: この道から {?行きます／行けます}<sup>19</sup>。  
 c. 5時にちゃんと起きられるか心配だったけど、目覚まし時計のおかげで {??起きた／起きられた} よ。

のように、動作主の行為実現に対する期待・意図が明確な場合は可能表現がなじむことが分かる。さらに、(36)aでは「明日行く川で」が、(36)bでは「この道から」、(36)cでは「目覚まし時計のおかげで」という句が行為実現の許容性・条件になっている。また、志波（2018）でも議論したが、受身と両義的なラレル文においても、動作主の期待・意図がある場合には可能の意味が現れる。(37)のAは、Q1のように先行談話（文脈）で動作主としての聞き手の行為実現への期待・意図がある場合には可能の解釈なるが、Q2のように話し手（聞き手）を動作主として想定せずに中立的視点で述べれば受身の解釈となる（志波2018: 313）。(38)(39)でも同様である。

- (37) A: この魚は生で食べられます。  
 Q1: 生で食べたいのですが食べられますか。  
 Q2: この魚は日本ではどうやって食べているんですか。  
 (38) a. 会議場前に（数台の）車が止められた。  
 b. 会議場前に（ようやく）車が止められた。  
 (39) a. 海にたくさんのゴミが捨てられた。  
 b. （捨てられるかどうか不安だったが）結構たくさんのゴミが捨てられた。

このように、「可能の意味」にとっては、「動作主の意図・期待」と「行為実現の許容性・条

<sup>19</sup> なお、「この道を行けば着きます」であれば自然であることから、動詞によってこの不自然さは変わるようである（「着く」は「行く」より瞬間的であり、自然発生的変化の自動詞に近いのだろう）。また、一般に(36)aのように実現系可能の場合は可能形式が自然になることが多く、(36)bのような潜在系の可能であると通常の動詞形でも自然なことが多いようである。

件」が必須のファクターであると考えられる。

さて、中動受身構文については、英語中間構文の典型的な特徴として言われていることが本多 (2014) でまとめられているので、ここに引用する。

(40) 中間構文の典型例の性質 (本多2014: 15-16を改変)

- a. 動詞は他動詞が基本。それが自動詞のように使われている。
- b. 主語名詞句は Patient (Theme/Undergoer) であり、他動詞の目的語に対応する。
- c. 動作主 (Agent) が意味的に存在する。構文に明示される場合は by ではなく、for による。また、動作主は (話し手を含んだ) 任意の人物である。
- d. 特定の時間に起こった出来事ではなく、主語の一般的な性質・属性を表す。時制は通常、単純現在形。
- e. 「～できる／～しやすい」という可能・難易の意味合いを持ちやすい。
- f. 総称的である。
- g. 通常、付加詞 (easily, well など) や助動詞 (will, won't など) が現れる。

以上の英語中間構文の特徴はスペイン語の中動受身構文にもほぼ当てはまる。では、こうした中動受身構文の特徴から、どのように可能の意味が現れるのだろうか。

本研究は次のように分析する。まず、中動受身構文は、意味的に必ず動作主を含意する構文であるため ((40)c)、(35) の1) は満たしている。特に、無対他動詞 (読む、駐車するなど) が要素である場合は、通常、動作主を介せずには起こり得ない事態を表すため、構文が必ず意味的に動作主を含んでいる。これに対し、自然発生的変化を表し得る動詞 (乾く、溶けるなど) では、前後文脈により、動作主を語用論的に含意する<sup>20</sup>ことが必要である。次に、常に未完了時制 (典型的に超時) で用いられ、個別具体的な出来事ではない ((40)d) ことから、(35) の4) を満たしていることになる。

さらに、可能の意味が現れる上で必須と考えられる「動作主の意図・期待」についてはどうであろうか。本研究では、中動受身構文の特徴とされる難易副詞 (easily) や評価性の副詞 (well など) によって ((40)g) 動作主の意図・期待が含意されるものと考え。「簡単に行為が実現する」「実現が難しい」「良い状態で行為が実現する」と述べることは、当該行為を「できるだけ簡単に実現したい」「より良く実現したい」という動作主の意図・期待への読み込みにつながるものと考えられる。

最後にもう一つの重要なファクターである「行為実現の許容性・条件」についてであるが、中間構文は基本的に主語に立つ対象の「属性 property」を述べる構文である ((40)d)。この対

<sup>20</sup> 本多 (2014) の「ゼロ動作主の読み込み」に相当すると考えられる。



象の属性が行為実現の許容性・条件として読み込まれることで、可能の意味が出るのだと考えられる。「対象の属性が行為実現の許容性・条件として読み込まれる」とは、本多（2018）の言う「原因帰属」ということだろう。なお、この対象の属性、すなわち「行為が時間を超えて実現する」ための性質は、行為動詞で語られなければならないだろう。「この本は読むのに簡単だ」と述べても可能の意味は出ないからである。

以上述べたように、中動受身構文は、①難易・評価を表す副詞句によって、「動作主の意図・期待」が含意され、②行為動詞が超時で用いられることにより、③時間を超えて動作主の行為が実現する「属性 *propiedad*」を主語の対象が持っていることを語っている。そして、④この対象の属性が行為実現の許容性・条件と解釈されることにより、可能の意味を安定的に持っていると考えられる。

### 3.3 中動受身構文と「規範 *normative*」の解釈

次の(41)は、動作の難易の副詞ではなく、対象の状態を表す形容詞句を伴っている。この構文は、「対象の特性」を表している点で中動受身の下位タイプと考えられるが、「可能」の意味ではなく、「一般に当該の状態を対象に働きかけるものだ」という「規範 *normativo*」(García Negroni 2002)の意味を表している。(41)では聞き手を動作主として想定しながら、聞き手が当該行為を意図していないことに対し、「人々は一般にこうする。だから君もこうする」という述べ方で、規範、さらには遠回しの命令をも表し得ると考えられる。

(41) El champagne **se bebe** frío. (García Negroni 2002: 275)

シャンパンは冷たく飲むものだ。【中動受身構文】

次の(42)は、規範解釈に加え、可能解釈、及び単なる習慣としての受身解釈とも両義的であると考えられる (cf. (37))。カッコ内の「チリでは」のように、聞き手を動作主に含まない(動作主として想定しない)と考えられる場合は、受身の解釈に傾くと考えられる。

(42) (En Chile) Este pescado **se come** crudo.

(チリでは) この魚は生で食べられる。／この魚は生で食べるものだ。【中動受身構文】

一方、(41)に可能の意味が出ないのは、当該事態の実現を聞き手が望んでいるという解釈がしにくいからだろう。よって、文脈構造(談話構造)上、聞き手(話し手)の事態実現への意図や期待が含意されれば、可能の意味が読み取られる。

(43) A: Quiero tomar café frío.



冷たいコーヒーを飲みたいな。

B: Este café **se toma** frío.

このコーヒーは冷たくして飲めます（飲まれます）よ。【中動受身構文】

### 3.4 対象以外が実現の許容性となる場合

中動受身は能格構文と受身構文と形式及び意味的な領域を重ねているが、未完了時制（超時）で述べられる点、及び主語に立つ対象の属性（property）を語る点で2つの構文とは異なる。そして、これまで見た中動受身の文はすべて主語（非情物対象）の属性が事態実現の許容性となっている例であった。一方、受身構文、さらには受身構文の延長としてある主語のない非人称構文でも、未完了時制（超時）で用いられたときに、主語以外の属性が行為実現の許容性・条件となることにより、可能の意味を帯びることがある。次の文は「bien (well)」という評価性の副詞により、動作主の意図・期待が含意され、また、場所句が行為実現の許容性・条件として解釈されることから、可能の意味を持つと考えられる。

(44) **Se come** bien en este restaurante.

このレストランでは美味しく食べられる。【非人称構文】

(45) **Se vive** bien aquí.<sup>21</sup>

ここでは一般によく暮らせる（ここは暮らし向きが良い）。【非人称構文】

次の(46)は、難易や評価の副詞を伴っていない。よって、常に可能の意味を持つわけではない。独立した文としては「人は一般にそうする」ということだけを述べており、「規範」と「可能」の両方の解釈を持ちうる。ここでも、先の中動受身構文同様、文脈・談話上、当該行為を実現したいという動作主（聞き手や話し手）の意図・期待が含意されれば可能の意味を持つ。これに対し、聞き手が当該の動作をやろうと意図していない場合にこの文を提示すると、「人は一般にこうするものだ。（よってあなたもこうするべきだ）」という規範の解釈になるのだと考えられる。また、(47)は主語（対象 la calle）のある受身構文であるが、時の節（～するとき）が実現の許容性となって、同様に可能ないし規範の意味を持ちうる。

(46) A: ¿Cómo podemos ir a la estación?

どうやったら駅に行けますか。

B: Por esta calle **se va** a la estación. （出口1982: 314より改変）

この道を通って駅に行けます。【非人称構文】

<sup>21</sup> こうした自動詞の非人称構文では、「bien (well)」や「aquí (here)」などの副詞句が必須であると言われている。

- (47) Cuando el semáforo está verde, **se cruza** la calle.  
 when the signal is green se crosses the street  
 信号が青の時に道を渡れる（道が渡られる、渡るものだ）。【受身構文】

ところで、次の(48)は、場所句を持つが、規範の意味も可能の意味も持たない。非人称構文や受身構文が規範や可能の意味を持つのは、(42)の受身解釈同様、やはり総称的動作主の中に聞き手が含意される場合、つまり動作主として聞き手を想定している場合に限られるのだろう（聞き手の行為実現への意図があるときに可能、意図がないときに規範となる）。

- (48) **Se habla** español en México.  
 メキシコではスペイン語が話される。【受身構文】

これに関連して García Negroni (2002) は、主語である対象の語順が、中動受身と受身の解釈に影響することを指摘している。すなわち、主語が主題化されて動詞に前置すれば中動受身解釈となり、主語が動詞に後置されれば受身解釈になると述べている（García Negroni 2002: 283）。

- (49) a. Estas raíces **se comen**. [=estas raíces son comestibles] (García Negroni 2002: 283)  
 these roots se eat.3PL.PRS. [=these roots are eatable]  
 これらの根っこは食べられる（これらの根っこは食用に適する）。【中動受身構文】
- b. En este país **se comen** esas raíces. [=la gente de ese país come esas raíces]  
 In this country se eat.3PL.PRS. those roots [=the people of that country eat those roots]  
 (García Negroni 2002: 283)  
 この国ではその根っこは食べられる。【受身構文】

しかし、(49)b であっても、話し手や聞き手が当該行為の実現を望んでおり、「別の国では食べられないが、この国では」という前後文脈があれば、場所を行為実現の許容性とする可能の解釈が可能であると思われる（たとえ受身構文だとしても）<sup>22</sup>。つまり、se による中動態における可能の意味は、中動受身構文の場合に構文の意味として安定的に現れるが（ただし難易や評価の副詞がある場合に）、受身構文や非人称構文であっても、難易や評価の副詞もしくは前後文脈により動作主の意図・期待が含意され、事態実現の許容性・条件としての場所句や時間

22 逆に (49)a は、中動受身構文であるが難易等の副詞句がないため、構文だけでは動作主の意図が含意されず、「食用である」という属性だけを述べていると考えられる。この文が可能の意味を帯びるためには、前後文脈での動作主の意図・期待の含意が必要だろう。

句を伴えば可能の意味を持ちうる、ということである。場所句や時間句を事態実現の許容性として読み取るか否か（つまり、本多2018の言う「原因帰属」の解釈が起きるか否か）は、やはり動作主の意図・期待が読み取れるか否かにかかっていると考えられる。

以上、中動態における構文が可能の意味を持つためには、超時（未完了時制）で対象ないし場所や時間の属性を語ることに加え、動作主の行為として動作主の意図・期待を合意する必要があることを述べた。難易や評価を表す副詞句と共起すれば、動作主の意図を合意させるため、1文のみで安定して可能の意味を帯びる。しかし、副詞句がない場合は、前後の文脈構造によって動作主の意図・期待が合意されることが必要である。そして、こうした条件がそろった文は中動受身構文と受身構文、非人称構文にまたがっている。

#### 4. まとめ

本稿では、スペイン語の再帰接辞 *se* による中動態（再帰構文）がどのような場合に可能の意味を持つのかを尾上（1998）の定義を援用して検討した。尾上（1998）の定義から、可能の意味が現れるためには、①動作主の含意、②動作主の意図・期待の含意、③行為実現の許容性・条件の存在、④個別一回的な出来事ではなく、時間を越えた事態である、という4つのファクターが必要であると考えた。そして、*se* による中動態が可能の意味を構文として安定的に持つのは、難易や評価の副詞を伴う中動受身構文である。中動受身構文は、超時（未完了時制）で主語に立つ対象の属性を述べる構文だが、この対象の属性が行為実現の許容性・条件として解釈されることで③と④を満たし、また、難易や評価の副詞があることで①と②を満たしていると考えられる。一方で、難易や評価の副詞句がなくても、前後文脈で動作主の意図・期待が語用論的に合意されれば、可能の意味を持ちうることも述べた。さらに、対象の属性を語るのではない、受身構文や非人称構文でも、場所句や時の節（時間句）が実現の許容性・条件と解釈されることで、可能の意味を持ちうることも明らかにした。

また、スペイン語の中動受身が表すもう一つの規範の意味については、「人は一般にこうする（ものだ）」と述べることで、当該行為を意図していない聞き手が動作主に想定されると、「だから君もこうするんだ（べきだ）」という規範、さらに弱い行為要求の表現になることを述べた。一方、合意される総称的な動作主に聞き手が含まれないと解釈されると、一般の人々の単なる習慣を述べるだけになることを考察した。

なお、*se* 中動態の中で可能の意味を帯びる構文は、日本語学の議論で言えば、すべて「潜在系可能」であり、「実現系可能」<sup>23</sup>は表すことができない。また、行為実現の許容性・条件が対象（の属性）や場所や時間にある可能表現であることから、潜在系の対象可能、場所可能、時

<sup>23</sup> 「潜在系可能」と「実現系可能」については、奥田（1986）、渋谷（1993）を参照。対象可能、場所可能、時間可能等についても、渋谷（1993）に詳しい議論がある。

間可能等であると考えられる。つまり、動作主の属性（能力等）が事態実現の許容性・条件なのではない、ということが se 中動態における可能表現の重要な特徴であると考えられる。

今後は、日本語との対照を目指すとともに、フランス語やドイツ語、英語等、他の言語との対照も視野に入れながら、スペイン語の se 中動態における各構文が表す意味について記述と考察を深めていきたい。

## 略記号

3SG：3 人称単数、3PL：3 人称複数、PP：過去分詞、PRS：現在、PST：過去

## 参考文献

- 奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」言語学研究会（編）『ことばの科学 1』181-212. 東京：むぎ書房。
- 尾上圭介（1998）「文法を考える 6 出来文（2）」『日本語学』17-10：90-97.
- 志波彩子（2018）「受身と可能の交渉」『名古屋大学人文学研究論集』1：305-323.
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1)：i-262.
- 出口厚実（1982）「スペイン語—再帰形式をめぐって—」寺村秀夫（他）編『講座日本語学10 外国語との対照 I』305-318. 東京：明治書院。
- 春木仁孝（2002）「フランス語の再帰構文 その認知的一体性」西村義樹（編）『認知言語学 I：事象構造』37-62. 東京：東京大学出版会。
- 春木仁孝（2009）「フランス語再帰構文受動用法の一体性について—モダリティーの観点から—」『言語文化研究』35：119-140.
- 春木仁孝（2010）「現代フランス語の再帰構文受動用法：副詞的要素、潜在的動作主と意味解釈」『言語文化研究』36：125-145.
- 寺崎英樹（2011）『スペイン語史』東京：大学書林。
- 本多 啓（2014）「プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考」『神戸外大論叢』64(1)：15-43.
- 本多 啓（2018）「英語中間構文と反使役化—初谷論文への回答」『神戸外大論叢』69(1)：27-45.
- 山口和彦（2010）「可能構文の文法範疇について」札幌医科大学『医療人育成センター紀要』(1)：43-54.
- 吉村公宏（2012）「中間構文の意味論の本質」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座第 2 巻 構文と意味』pp. 201-220. 東京：ひつじ書房。
- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de Linguistique Générale*. Paris: Gallimard. (岸本通夫訳 1983 『一般言語学の諸問題』みすず書房).
- García Negroni, María Marta (2002) La construcción media con *se*. In: Sánchez López, C. (ed.) *Las construcciones con se*, 209-234. Madrid: Visor Libros.
- Gómez Torrego, Leonardo (2013) *La impersonalidad gramatical: descripción y norma, 4ª edición (Cuadernos de lengua española, 1ª edición en 1992)*. Madrid: Arco Libros.
- Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: semantic maps and cross-linguistic comparison. In: Tomasello, Michael (ed.) *The new psychology of language*, vol. 2: 211-242.
- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice* (Typological Studies in Language 23). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Mendikoetxea, Amaya (1999) Construcciones con “se”: medias, pasivas e impersonales. In: Violeta Demonte and Ignacio Bosque (eds.) *Gramática descriptiva de la lengua española, Vol. 2: 1575-1630*. Madrid: Real Academia Española/ Espasa Calpe.

- Monge, Félix (2002) Las frases pronominales de sentido impersonal en español. In: Sánchez López, C. (ed.) *Las construcciones con se*, 341–391. Madrid: Visor Libros. (1955年の *Archivo de Filología Aragonesa VII*, pp. 1–102に掲載された同タイトルの論文の筆者による要約版)
- Sánchez López, Cristina (2002) Las construcciones con *se*: Estado de la cuestión. In: Sánchez López, C. (ed.) *Las construcciones con se*, 13–163. Madrid: Visor Libros.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passive and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61–4: 821–848.

キーワード：中動態（再帰構文）、可能、受身、中間構文、規範

**Abstract**

How does the potential meaning emerge in the middle voice with *se* in Spanish?

SHIBA, Ayako

We revealed the mechanism of how and when the potential meaning emerges in the middle voice with *se* (reflexive construction) in Spanish. The construction which has a stable potential meaning stably is called “middle-passive,” which corresponds to the English middle construction. According to the definition of “potential” in Onoe (1998), the most important factors for the potential meaning are the intention or the expectation of the implicit agent and the existence of the condition or the permissibility for the action to be realized. While the middle-passive construction is known as the patient/theme-subject construction, it is also said to describe the subject’s property in the imperfect tense-aspect. In addition, it often takes an adverbial phrase of difficulty. We consider that this adverbial phrase induces the implicature of the agent’s intention to the realization of the action and the property of the subject is construed as the condition for the action that the verb refers to. Moreover, we argue that the passive and impersonal constructions can also have the potential meaning when its tense-aspect is imperfect and additionally, the agent’s intention is implied in the context when it has the place or time phrase that can be construed as the condition.

Keywords: middle voice (reflexive construction), potential meaning, passive, middle construction, normative